

二、育英団体として

設立当初の有為会の会員相互の人的な交流と、月刊の『有為会雑誌』の誌上での意見交換を通じて、育英事業に取り組む方向性の認識が、徐々に高まります。

そうした中、明治33（1900）年の総会で通則が修正され、「東京、仙台に寄宿舍を設立すること」の条項が追加され、寄宿舍開設を目指すこととなりました。その後、日露戦争という混乱期を乗り越え、寄宿舍設立の準備が続けられ、明治42年4月3日に待望の寄宿舍興讓館の開館に至ります。有為会から設立から約20年の準備期間を経て、同郷学生を経済的に支援する育英団体として、有為会は新たなスタートを切りました。

また、東京興讓館寮の開設直後には、念願の奨学金貸与制度も発足しました。さらには大正3（1914）年には仙台興讓館、昭和5（1930）年には札幌興讓館と、各地に寮を整備し、在郷学生が進学するための支援を行ってきました。

育英事業の資金と上杉家の支援

これらの育英事業の資金は、郷土愛に立脚し、志を共にする会員からの寄附に拠りました。また、特に東京興讓館寮の整備に際しては、当初の明治期の開設、後の昭和期の新築移転、さらに戦後の新築再建のいずれの時期においても、上杉家からの物心両面にわたる多大な支援を受けました。この恩徳が、有為会の育英団体としての活動の全国的な展開を可能としてきました。

また、上杉家歴代当主の、運動会や園遊会、東京興讓館寮生の歓送迎会等への臨席と交流は、会員や現役学生の大きな励みにもなってきました。



上杉家第14代 上杉茂憲 (1844-1919)
米沢市上杉博物館蔵



上杉家第15代 上杉意章 (1876-1953)
当時の米沢有為会総裁